

生徒が社会事象に興味を持つとともに、社会認識を深めていくための新聞利用のありかた

長野県上高井郡小布施町立小布施中学校 新谷逸也

1. 実践の概要

(1) 本校の概要と実践の方向性

本校は全校生徒373名、1学年3クラス、2・3学年4クラスの中規模校である。小布施町には小学校・中学校ともに1校しかなく、中学校入学以後の緩やかな人間関係の変化はあるものの、全体としては長年の勝手知ったる仲間たちのなかで、落ち着いた学習ができる環境にある。

生徒の実態としては、授業に対してまじめに取り組むことができるが、自ら主体的に興味を持ったり、積極的に授業に関わったりすることができず、受動的な取り組みになりがちな生徒が多い。こうした生徒たちに対して、主体的な学習を行なうための取り掛かりとなる「興味・関心」を育てるためのきっかけ作りの1つとして、本校は新聞利用を取り入れている。

(2) 平成13年度の活動

平成13年度は、「生徒が社会事象に興味を持つとともに、社会認識を深めていくための新聞利用のありかたはどうあったらいいか」を研究テーマにすえ、主に社会科が中心となって研究を進めてきた。本校では、特に3学年の公民的分野を中心に、以下のような4つの活動を継続的に行なってきた（詳細は今年の報告書参照）。

- ① 毎時間当番を決めて、授業のはじめに新聞記事から時事問題を発表させる。
- ② 新聞記事、判例、当事者へのインタビューやビデオ資料を授業の中で多く利用し、教科書の記述と現実の社会とを結び付けて考えられるようにする。
- ③ 生徒に1時間の授業への取り組みをふり返させ、自己評価を含めて、扱った出来事についての自らの考えや感想を書かせる。
- ④ 多角的・多面的な見方・考え方が可能な事件や出来事に対して、自らの立場をかえながら、新聞記事などの資料を参考に説得力ある主張を文章として組み立てたり、論旨を整えてディベート的な活動を行う。

このような活動の成果として、生徒の変化から次のような3点が考えられる。

- ① 理解力の向上により、求められている内容に対して感想がかみ合うようになった生徒の姿があった。
- ② 自分の感情のみに立脚した主観的な意見しか書けなかった生徒が、新聞等の資料を利用したり、ほかの立場の生徒の意見もふまえ、根拠をもって自分の意見を組み立てられるようになった姿があった。
- ③ 生徒自身の心のなかで、授業を通じて既得概念が揺さぶられ、考え方に迷いがみられたり、葛藤したりする場面がみられるようになった。

こうした平成13年度の成果をうけて、平成14年度は社会科以外でも様々な実践がためられるようになった。

(3) 平成14年度の活動

① 国語科の実践

国語科では新聞コラムを題材として要約文を書くという実践を行なった。こうした実践により、世の中の動きについて興味を持つ生徒も増え、また、継続的な「まとめなおす」作業により、理解力や表現力に厚みがみられるようになった。

② 社会科の実践

社会科では、前年度の3学年を対象とした実践を継続するとともに、新たに2年生にも対象を広げた活動を行なった。

具体的には、2年生に対して夏休みに「親子新聞」と題した課題を課した。これは、興味のある新聞記事を選び、その記事に対して自分のコメントを書くとともに、家庭の人からもコメントを書いてもらって意見交換をするという、いわゆる「ファミリーフォーカス」の手法を用いたものである（下記の新聞記事参照）。

記事に親子でコメント

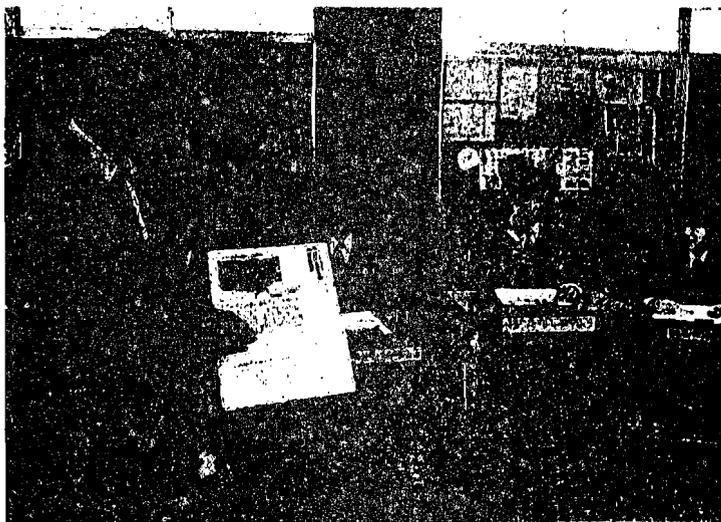
長期間の休みや連休を利用して、興味を持った新聞記事を切り抜いて自分と親のコメントを添える「親子新聞」を、2年生の社会科授業の一環で作っている。

「なぜ、二人は普通に通園することができないのかな」「外務省は同じ境遇の人を刺激しないため、何も書かないのでは」。中国・瀋陽の日本総領事館職員が北朝鮮から脱出した日本人妻と娘を保護したことや、外務省が「コメントを書きなさい」としていることを報じた記事について、生徒と保護者のコメントだ。

中谷龍朗教諭(ひば)は、▽親子の会話の時間が増える▽親子で互いの考え方を学ぶことが出来る――と親子新聞の効果を考えている。昨年度と今年度、NIE実践校の指定を受けた。

B4判の紙一枚にまとめた親子新聞は、スペースシャトル「コロロンビア号」の空中分解事故、韓国で起きた地下鉄放火事件、米プロバスケットボール協会で活躍する身長百六十五センチの選手活躍などテーマは様々。社会科の時間を

親子新聞 小布施中学校 (小布施町) に取り組む



家で作った親子新聞を発表する生徒

ラスメートの前で発表し、質問や感想を述べあう。

話題探したため、新聞の一面を毎日見る生徒が増えた。中谷教諭は「反抗期はけに、親子で話し合う機会を持つことで保護者からも好評です」と話している。

次回は東海大三高校(茅野市)と小川小学校(小川村)を訪ねます。

3/1 読売新聞

今日は2時間目に読売新聞の方が取材に来ました。それでいつものように3人前に出て新聞を読みました。そのあといくつか質問され、次に記者の方は1人ずつ新聞を見てまわっていました。すると、恭平くんのところで「あっ」というので何かと思ったら、「これ僕が書いた記事だ」と言っていました。とてもすごい偶然だと思いました。新聞にのるのは3/1ですが、読売は取ってないので、とっている人に頼みます。
(取材があった日の生徒の生活ノートから)

③ 英語科の実践

英語科では、授業で扱うテキストに関連する内容（地雷除去や地球環境問題など）の新聞記事を紹介したり、生徒たちが持ち寄って話し合うような活動を行なった。持ち寄った新聞記事は、台紙に貼って教室掲示をしたが、興味を持った生徒たちが熱心に読んだり、更に新たな新聞記事を見つけてきて紹介したりするような姿があった。

英文日記の中に感想を書いてきた生徒もいた。

④ 選択社会科での実践

選択社会科(2学年)では、前期は人物学習、後期はディベートというテーマを設けた。特に後期のディベートでは、立論を作成するに当たって新聞資料が大いに役立っていたようである。ちなみに、設定したディベートテーマは次のとおりである。

- 1 日本は外国人労働者を受け入れるべきである
- 2 日本は消費税を引き上げるべきである
- 3 日本は選挙の棄権に罰則を設けるべきである
- 4 日本は死刑制度を廃止すべきである
- 5 日本は夫婦別姓を認めるべきである
- 6 日本は原子力発電所の新規建設を取りやめるべきである
- 7 日本は高校生の携帯電話所有を大幅に制限すべきである
- 8 日本は犯罪報道を実名ではなく、匿名にすべきである
- 9 日本は少年犯罪に対して厳罰でのぞむべきである
- 10 日本は定年退職制を廃止すべきである
- 11 日本はごみ収集を有料化すべきである

ディベートにおいては、本番における主張の良し悪しもさることながら、見つけた資料を利用して、どれだけ説得力ある立論をつくらることができるかという点が勝敗を分けると考える。その意味においては、新聞の社説や投書欄は、単に事件の説明にとどまらず、ある一定の考え方に基づいて書かれた文章という点で、その問題に対して肯定・否定いずれの立場の生徒からも、自分自身の主張を作り上げるうえで大きく役立った。

いうまでもないが、ディベートで問われるのは、「どちらが正しいか」ではなく、「どちらが説得力があったか」ということである。今回、ディベートに負けたチームには、「なぜ負けたのか」を考えさせるためのレポートを課した。

下の文章がそれであるが、生徒たちがディベートを通してどんなことを大切にしているのか分かるのではないかと思う。生徒が書いているように、そこで問われているのは「応答」のしかたであり、論旨の「一貫性」であり、聞いている人たちを「こんらん」させないことである。

このような力は、単に教科書を読んでいるだけで伸ばされていくものではない。新聞という身近で、かつ、論旨のまとまった資料は、議論の題材となるばかりでなく、生徒の理解力や表現力を高める上でも非常に有効であるように感じた。

ディベート敗者レポート

(2)年(3)組(23)番 氏名()

◎今回のテーマ (日本は定年退職を廃止すべきである)

◎今回の敗因

反論または質問の応答がしなやかでなかった。とにかく自分が持っている知識をいかに濃縮させてかみは、てみたが、一貫性がなかったり、その質問に合った答えがなかったり、きいている人達をこんらんさせてしまった。

◎次回、勝利をおさめるために必要なこと

The. 7-47-70

The. 反論・質問を想定し、いかなることを考え、用意しておく。

人は絶対に

負けな

次回は、がんばろう!!

ディベート記録用紙

論題：(日本は定年退職制を廃止する)
議論の要約

	評点 (5点満点)	肯定側	否定側	評点 (5点満点)
立論	3	① ② 働くことで寿命が延びる。	③ ④ ⑤ 能率が下がる 能率が上がる 仕事をやめて楽にする	4
否定側 質問			② なし	
肯定側 質問		④ 高齢者を使えないで すか?	いいえ	
否定側 第一反論			⑤ 失業率が上がってしまう がS世代交替した方が いい。	4
肯定側 第一反論	3	⑥ 体を使って働くことが少 い。		
否定側 第二反論			⑦ パソコンが使えるとは思え ない。	4
肯定側 第二反論	3	⑧ 豊かな日本にしよしょう。		
相互討論		⑨	⑨	
結論	3	⑩ 若い人は仕事に何かを力 をいかに 定年退職制を廃止する。	⑩	4

ディベート審査用紙

2年(2)組 4 番 氏名 _____

(1)分析

肯定側	否定側
まとめ	まとめ

- ・論理力 (主張される考え方に一貫性はあるか?) →肯定側(6 /10)点 否定側(6 /10)点
- ・説得力 (主張に説得力はあるか?) →肯定側(5 /10)点 否定側(6 /10)点
- ・論点对応 (相手の主張や質問をしっかりと受け止めて対応できているか?)
→肯定側(7 /10)点 否定側(6 /10)点

(2)総合判定

肯定側 (30) 点 否定側 (32) 点 <これまでの合計点>

(3)評決 < 肯定側、否定側 > ←いずれかに○

判定理由 (勝敗の判定に一番影響があった理由について書くこと)

(4)ディベート全体の評価: 分かりやすさ (2) 点、面白さ (4) 点 <5段階>

がんばった人: 久保田 さん

(5)自分の意見の変化: ↓いずれかに○

最終的な自分の立場 < 肯定・否定・不明 >

最終的な自分の立場は < 変わった・変わらない >

ディベートを通じて自分の意見の内容は < 深まった・変わらない・分かんなくなった >

(6)自分の意見:

ますます、とろとろもいってけいえなくなった。

⑤ 生徒会での利用

新聞の保存および活用は、図書委員会が中心になって行なった。従来とっていた新聞1社分に加え、今回は新たに3社を加えた合計4社分の新聞を図書館ロビーの机の上に配置し、来館者が自由に新聞を読めるようにした。机上有るという気安さからか、来館した多くの生徒が利用していた。前日までの新聞はラックにとじこんだが、これも自由に閲覧できるようになっていた。



図書館で新聞を閲覧する生徒

また、生徒会室には、「他校の生徒会活動」コーナーを設けた。ここには、他校の生徒会活動を取り上げた新聞記事を切り取って掲示し、本校の生徒会活動の参考にしている。

(4) 平成15年度の実践

本校のNIE研究指定は平成13～14年度ということで、平成15年度は研究指定校ではないものの、昨年までの研究及び実践を今後とも生かしていきたいと考えている。

平成14年度、「親子新聞」によって社会的関心の萌芽がみられた2年生たちも今年は3年生になり、今までNIEで育ててきたものを何とか今年もつなげていきたいと考えていた。

そこで平成15年度に利用しているのが「選択社会」の時間である。3年生の選択社会では、「時事問題」をテーマにした次のような活動を計画している。

月	月のテーマ
4月	新聞の読み方ガイダンス
5月	時事問題「身近な社会・人権」
6月	ディベート「身近な社会・人権」
7月	時事問題「政治」
8月	ディベート「政治」
9月	時事問題「経済」
10月	ディベート「経済」
11月	時事問題「国際」
12月	ディベート「国際」
1月	受験対策（論述）
2月	受験対策（資料読み取り）
3月	受験対策（総合）

※基本的に公民分野で扱う内容と関連させていく予定です。このほか日常的にコラム（信毎でいう「斜面」）や時事問題に関連する記事も扱います。

以上のようなテーマに沿って、具体的には次のような活動を考えている。

- ビデオ「子どもニュース」を視聴する活動
- 月ごとのテーマもしくは最近起こった事件について関連するようなコラムや新聞記事を用いて、全員が共通で考えるような活動
- コラムや新聞記事から考えたことについて意見交換をしたり発表したりする活動
- その週の新聞から、各自の興味に沿って読み取るような作業的活動
- ディベートによって自分の意見を発表したり、相手の意見に耳を傾けたりするような活動

例えば、次のようなワークシートは毎回継続して取り組ませていくつもりである。

コラムと読みつくそう！ 第(1)回 (ノ)

力の空白がイランに及びた混乱はひどい。独裁体制の象徴だった大統領官邸なども倒壊し、一般商店も襲われる。外国人大使館やホテルはもちろんだが、病院でさえ例外ではない。略奪行為がはびこる。病人の使つていたベッドまで持ち去られている。戦火のけがに加えて治療も受けられないのでは、治安の悪化との二重の悲劇である。停電も断水も復旧できず、水不足が幼い子供たちを苦しめる。この構わずという典型が、首都バグダットの国立博物館の場合だ。つづ。楔(くさび)形文字などを生み出した古代メソポタミア文明、その遺跡からの発掘物が徹

斜面

兵士は逃げ、警官も投人も棄てられた。米空軍が全土を監視した。たほいえ、権

止めを放棄している。4/15

戻して売られた。外壁を壊して侵入し、約50万点もの歴史品を持ち出している。世界的な文化遺産の略奪、凄惨だ。悔やみきれない。身の安全も脅かされている。マレーシアの歴史文豪チームは武装グループに襲撃された。バグダッド市内のホテルから病院へ向かう途中だった。イラク人運転手が死んでいる。自衛軍で市民が武装する姿にもなった。銃が衝突がいつ起きないとも限らない。暴力的な力が支配すると、泣かされるのは力のない人たちである。女性や子供たち、さらに老人、病人が、自らを守るすべもなく恐怖にさらされる。決して「圧制から解放された」もの自由になど言えるものではない。一刻も早く曲

★ コラムを読んで考えてみよう

① 内容を要約してください

米空軍の7セイン政権の崩壊により、イラク国内では様々な混乱が起きている(略奪など)。そのせいで博物館などの古代メソポタミア文明の遺跡からの発掘物も荒らされてきている。そして、多くの人が死んだ都市では、市民が自衛手段として武装するのが見られる。この様な場合、女性や子供は特に危険な立場に置かれる。この状況を一刻も早く改革させるにはどうするか。

② 見出し(題)をつけてください

イラク国民の叫び

③ 自分の感想を書いてください

TVのニュースでは、7セイン政権崩壊してイラク国民は喜んでいると報道していたけれど、実際は違っていることに気が付きました。そして、TVのニュースでわからなかったこと、新聞記事で知ることができたこと、これから読みたい記事がありました。

★ 社会科「著の集」メモ～コラムの中の難しい言葉と調べよう!

掌握	

ちなみに、このような活動を年間継続していくことで、次の4つの力の伸ばすことをねらっている。

- ① 資料を読み抜く力
- ② 資料から自分の考えをまとめる力
- ③ 自分の考えを表現する力
- ④ 友達の考え方や先生の言葉から、自分の考え方をさらに深めていく力

2. 実践の成果と課題

この2年間、NIEの研究指定校となって、「生徒が社会事象に興味を持つとともに、社会認識を深めていくための新聞利用のありかた」というテーマのもと、新聞を用いた様々な実践に取り組んできた。こうした実践の中で、新聞を教育分野に用いることには様々な有効性があることがはっきりしてきた。

ちなみに社会科では、教科の目標として「①社会的事象への関心・意欲・態度、②社会的な思考・判断、③資料活用の技能・表現、④社会的事象についての知識・理解」の4点がかかげられている。NIEの実践をする中で、新聞を用いた教育効果はこの4点のすべてに関わることに気付かされた。

最後に、この2年の実践を通して私が感じた、新聞活用が学校教育にもたらすメリットを社会科の教科としての目標と関連させながら列記するとともに、残された課題についてもふれながら、雑駁ながらまとめとさせていただきたいと思う。

2年間、どうもありがとうございました。

<メリット>

(1) 関心・意欲面の向上

新聞記事は、生徒にとって「最も身近にある世界」のうちの1つである。テレビ報道やインターネットなど、現代はすぐに情報が手に入る時代ではある。しかし、人間は興味のある事件や出来事はじっくりと知りたいものである。生徒たちも、興味あるスポーツ欄や社会面などはじっくりと読み込んでいる。「知りたい」という気持ちが、テレビ報道などの即時性の中で流され忘れられやすい現代だからこそ、踏みとどまって生徒たちの「知りたい」という興味・関心に強く応えられる可能性があると考えられる。

(2) 思考・判断能力の向上

知識面において、新聞記事や社説・コラムから「情報の受け手」として学ぶことは多い。しかしそれ以上に、それらを話し合い活動やディベートなどにおいて「利用する」ことで、「情報の使い手」として学ぶことは多いように思う。

生徒たちは、日常生活の中で多くの時間を友人たちとのおしゃべりや手紙書きに費やしているが、しかし、あるテーマにおいて話し合ったり、考えをまとめたりという経験は少ない。だからこそ、あえて何か題材を設定し話し合ったり、考えたりする場面をつくることで、初めて「自分の言葉で」話し、考え、判断することができるようになっていくのだと思う。ここで、題材として新聞記事を利用することは、新聞記事自体が生徒にとっても身近であり、また先述のとおり、興味・関心の面においても強くひきつける力を持っているだけに、非常に手軽かつ有効な手段であると考えられる。

このような思考力・判断力・そして表現力は、トレーニングすることなしではつい

てはいかないものであるからこそ、継続的な新聞記事の利用は生徒たちにとって大きな力になりうる可能性を持つと考えられる。

(3) 資料活用能力の向上

新聞の読み方について、知っているようで知らないことは多い。テレビ欄に用いられる記号や1面の見出し・リードの位置など、新聞には受け手にとって分かりやすい表現をするためのルールがあることを知ると生徒は驚いた表情をする。しかし、これは、生徒自身が「分かりやすい文章表現」をするための大切な気付きである。

この点は社会科だけでなく、国語科とも密接に関連した内容であるが、資料活用能力には「受け手」としてだけでなく、「送り手」としていかに分かりやすい資料を発信できるかという面も含まれている。なかでもコラムなど、一旦まとめられた記事を更にまとめ直したりする活動は非常に難しいものであるが、これにより生徒たちは初めて自分の言葉で資料を理解することができるのである。

(4) 知識・理解の向上

一般的に「分かりやすい」記述の新聞表記ではあるが、しかし、中学生たちにとっては難しい漢字や用語も多い。しかし、記事を真剣に読んだり、意見を書いたり、内容について議論したりする過程の中で知っていく漢字や用語は、いわば「生きた言葉」として生徒たちの心のなかにどっしりと根を生やしていくものである。こうして、生徒たちは、生きた文脈の中で、生きた用語を獲得していくのであり、こうして身につけていくのが総合的な知識・理解であろう。

また、学校という集団の場で新聞を読むことは、情報の「受け手」として新聞を一人で読む場合と期待される効果は大きく異なる。つまり、集団で新聞記事を利用する場合、その利用の仕方は、その情報を他の誰かに伝えようとしたり、内容について議論したりするように、必ず他者の存在が前提となるわけである。こうして自分の既得概念と他者の考えがぶつかる時、自分の考え方が果たして本当に正しいのだろうかという思考の「ゆれ」が生じるのであり、結果として、このことは、自分の考え方や理解をさらに深めるという効用ももたらすのである。

<課 題>

(1) より効果的な教材化のありかた

新聞記事はある一定の観点から記述された文章である以上、それをを用いる教師側にも、はっきりと意図され教材化の観点が必要である。ただ新聞を用いればいいのではなく、「何をねらい」「どのように」新聞を教材化していくのか、不断の教材研究が必要である。

(2) 継続性をもって行なう新聞を用いた教育活動のありかた

先述した選択社会「時事問題」のような場合を除いて、学校では教科ごとのカリキュラムがあり、新聞利用が可能な教科・単元と、そうではないものがある。授業のなかに新聞を用いた活動を継続的に取り入れていくには困難もある。

(3) 全校生徒に対して、よりひらかれた新聞活用のありかた

新聞は全校生徒に対し、図書館での自由な閲覧を認めているものの、さらに効果的な活用方法はないものか考えていきたい。